

【作文】 小学生の部
最優秀賞 一つ一つの「普通」に感謝して

伊吹小学校 五年 膽吹 春太

「人権」って何？と聞かれても、ぼくには難しく解らない。調べてみると、一九四六年に日本国憲法というものが公布されて、その中に「基本的人権の尊重」という考え方が示されているそう。難しく、さっぱり解らない。「人間が、生まれながらもつ権利」って何かな。それを、大切にするって普通の事なのに、どうして憲法って大きな法りつにしたんだろう。ぼくのおばあちゃんは、ちょうどその憲法ができた時に生まれたので聞いてみた。

おばあちゃんが生まれた年、日本は戦争に負けてたいへんだったそう。お父さんは日本に帰って来られず、おばあちゃんと一回も会えなかった。だから、お母さんは、一人で四人の子どもを育てなくてはならなかった。おばあちゃんは毎日「ひもじい、ひもじい」と思っていたそう。ぼくは「ひもじい」を知らない。お腹が本当にすいて、動けないくらいとても辛い事だそう。ぼくの大好きな白いご飯なんてなかなか食べられなくて、ごちそうだ。ぼくにどつての白米は、当たり前で「普通」だ。ごちそうは、おすしや焼肉。おばあちゃんの子どもの頃の「普通」って、全然わからない。

お砂糖もなくて、甘い物もきちようだったそう。お豆も甘い物で、四人の兄弟で大切に食べたそう。でも、大切に少しづつ食べたのでくさってしまい、お兄さんにとっても怒られたそう。冷蔵庫もない事だし、どうしてそんな事で怒られなくてはならないのか、理不じんだと思った。でも、その頃は食べ物も甘い物もきちよう品だ。それに、女のおばあちゃんが、男のお兄さんに口ごたえなんてしてはいけない頃だったよう。今の「普通」と全然違っていて、ぼくには理解できない。

それでも、ぼくは気づいた。今はとても恵まれていることに。白米を毎日食べられる。甘くて冷たい物も食べられる。「ひもじい」思いをした事はない。お兄ちゃんとは言いたい事を言いあえる。そし

て、毎日お父さんと会えている。これは、ぼくと同じ小学校五年生のおばあちゃんに、一つもなかった事だ。

七十四年前に作られた憲法は難しい。けれど、その頃にはきつとこういう子どもがたくさんいて、そんな子ども達が、今の「普通」の生活が当たり前になるようにと願い、その頃の大人たちが考え作ったものではないかと思った。

ぼくは、お父さんが戦争で死んでしまうこと、白米が毎日食べられないこと、言いたいことが言えない事、全部いやだ。絶対にそんなことになりたくない。今は、こんなことがない。これが「人権」が守られているということなのだ。ぼくは今「普通」に自分がやりたい事をして、言いたい事が言える。そんな「人権」を大切にする憲法を作ってくれた、その頃の大人達やおばあちゃんに、感謝したい。今の、ぼくの一つ一つの「普通」、一つ一つの当たり前に感謝したい。そして、これからも、この「普通」が大切でぼくのおばあちゃん達が作ってくれた大切な「人権」である事を忘れずにすごしていきたい。

優秀賞 個性を大切に

柏原小学校 六年 吉田 彩乃

今年に入って、新型コロナウイルス感染しようが流行しました。新型コロナウイルス感染しよう対策のため、学校が三月からとつ然休校になってしまいました。

最初は休校になって、ちよつとだけうれしかったけど、一週間家で過ごして、毎日ひまでした。友達と話したり、出会ったりすることがなくなつて、私は全てにやる気がなくなつてしまいました。ゲームをしたり、テレビを見たりしても、楽しくもおもしろくもないし、食欲もなくなつてしまいました。食べていけないのに、お腹の中が気持ち悪くなつたりもしました。このまま休校が続いて、学校に行けなくなつたらいやだなと思いました。友達に会つてしゃべりたいなと思うと、自然となみだが出てきました。お母さんも心配してくれて、友達と連らくをとつてくれて、少しの時間だけ会うことができました。久しぶりに友達と会つて、少しの時間だったけど、たくさんしゃべつたわけでもないのに、自然と自分の気持ちに楽しんで、食欲もいつのまにか戻りました。

そして、学校の先生も家に来てくださつて、とてもうれしかったです。

六月から学校が再開して、今までとはちがった形での授業が始まりました。三ヶ月間、学校にも行けなかったり、友達としゃべることができなかつたりしたけど、今はとても楽しいです。今までは気づかなかつたけれど、友達は大切な宝物だと思います。

私の周りでは、いじめと感ずることもなく、男子も女子も仲良くしゃべつたり交流したりしています。でも、ニュースでいじめの話や聞くと、なぜそのようなことがおこってしまうのか、みんな仲良くしたらいいのなと思ひます。

この前、四字熟語で十人十色ということわざを知りました。どういう意味かわからなかつたので、調べてみました。

「性かくやもの考え方、とらえ方などは、人によつてそれぞれ

で、十人いれば十通りの色がある。意味や行動、感情もそれぞれで一律ではない。」

と辞書に書いていました。なるほどなと思ひました。友達と会つて、いろいろな話や情報交かんをして楽しく遊んでいると、自然と笑顔になつています。みんながこのことわざを知つて、もつと相手のことを大切に思つと、いじめも少しはへつていくんじゃないかなと思ひます。

一人でいると良い時もあるけれど、やっぱりさみしいです。友達と居られる学校が大好きです。みんな学校が楽しいと思えるよう、友達を大切にしていきたいです。そして、好きな物や興味があることも、みんなそれぞれなので、相手を否定しないようにして、友達と楽しくしたいと思ひます。

入選 「高齢者の人権問題について」

河南小学校 六年 細江 愛来

私は、高齢者の人権とはどういうことなのか、考えてみました。それは、人間が人間らしく生きていく権利であるということが分かりました。実際にお母さんから私のひいおばあちゃんの話を書きましました。ひいおばあちゃんは「筋いしゆく性そくさく硬化症」という難病で亡くなったそうです。この病気は、手足やのど、舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんとなくなつて、力が入らなくなることから始まり、杖をつく、歩行器で歩く、車いすになつたそうです。トイレも自分では行けなくなり、おむつになつていき、ひいおばあちゃんは、「おむつはしたくない。これは本当に嫌だ。」と言ひ、最初はおむつの中ではいせつすることを嫌がり、自分でどうにかトイレに行こうとしたりして、車いすやベッドから落ちたりしていたそうです。トイレの度に家族がトイレまで運んでいたそうですが、最初は踏ん張つて立てる力があつても、結局できなくて座り込んでしまつたり、倒れてきそうになつたり大変だつたと聞きました。おばあちゃんやお母さんが、「おむつの中でしてくれてかまわんのよ。」と言つても、最初はしてくれなかつたそうです。いくら家族でも、恥ずかしいという思いと同時に、汚いことをさせてごめんねという、ひいおばあちゃんの思いだつたと思います。これも一つの人権になるのではないのでしょうか。

私が生まれたとき、ひいおばあちゃんは生きて一年だけ一緒にでしたが、私にはその記おくがありません。ひいおばあちゃんが車いすに座つていて、赤ちゃんの私をひぎに乗せて抱っこしてくれている写真だけが残つています。その写真から少しして、家で介護をするのが困難になつていき、ひいおばあちゃんは入院しました。最後は、人工呼吸器をそう着し、意識はなく、機械を外してしまえば亡くなつてしまうという状況が続きました。機械をつけて四カ月後にひいおばあちゃんは亡くなつたそうです。

おばあちゃんやお母さんは、いまだに「あの時こうしてあげれば

よかつた。」「こうしてあげた方がよかつたかな？ どういう思いやつたのかな？」と考えたりするそうです。体が動かなくなつても、車いすがあつたんだから出かけることもできたし、もつとおいしいご飯を食べさせてあげることでもできたかもしれない。「こうしてほしい。」と言われたときに、少しでも寄りそうことができていたら、ちがう観点から見ることができていたら色々変わっていたかもしれない。もつとしてあげられることがあつたのかもしれない。

高齢者が生活をしていくためには、介護が必要です。介護者もたしかに大変だと思ひますが、高齢者も体が不自由になり、今まで自分でできていたことができなくなつていくというもどかしさもあるでしょう。その辛い気持ち、もどかしい気持ちを少しでも、理解してあげることができるようになれば、自然と人権の尊重ができるようになり、人権も守られるようになるのではないのでしょうか。

高齢者は今まで長い人生を歩んでこられた大先ばいです。その人たちが今の日本を作つてきてくれたと思ひます。そんな気持ちをもつていると高齢者に対する接し方も変わると思ひます。高齢者が安心して生活ができ、人間らしく生きていけるように私にもできることをしていき、高齢者が安心して生活していける社会は、全ての人たちにとつても幸せな社会になつていくんじゃないかと私は思つています。